

“学びをひろげる わたしと〇（まる）人の会” 第30回研究会まとめ

聞き合う授業、話し合う授業

2019年6月22日 松森俊尚 提案（“学びの会”スタッフ）

「聞く・聞き合う」ことを考える素材として、映画『青い鳥』（原作 重松清 監督 中西健二 主演 阿部寛）の部分を視聴しました。一作ごとに演技の幅を広げ進化を遂げる俳優阿部寛のファンとして見逃せない映画であったのですが、その作品に込められたテーマが私（松森）にとって、教育という具体的な営みの柱ともなったものでした。

視聴したのはこんな場面です——

◆2学期最初の日、（1学期にノグチくんが自殺未遂をしたことがまるで嘘であったかのように）生徒たちが登校してくる校門には生徒指導の教師や生徒会役員たちが立って、元気な声で朝のあいさつを交わしている。2年1組の教室も普段と変わらぬにぎやかな時間を過ごしている。



そして始業のチャイムが鳴る。休職中の担任に代わって非常勤講師のムラウチ先生が2年1組の生徒たちの前に立った。「・・・キュ・・・キュ・・・キュ・・・」、先生の口元から漏れる異様な「音」に教室中に緊張が走る。「ヒ・・・ヒキョウ ダナ」、何を言われたのか、いったい何が起こったのか、生徒たちは顔を見合わせ、今教室で起ころうとしている異常な事態に身構える。

緊迫した空気の中笑いをこらえる者がある。先生の吃音（どもり）の声をまねながら、今にも笑い声が弾け教室に広がろうとしたその時、ムラウチ先生は怒鳴り声をあげるのでもなく、力づくで威嚇するのでもなく、言葉をつづけた。（おそらくここが2年1組がまた学級崩壊を起こすかどうかのターニングポイントだったと思う。）

「ひ、ひきょうだな。忘れるなんて、ひきょうだな。先生はどもります。あんまり上手にしゃべれません。でも本気でしゃべります。だからみんなも本気で聞いてください。本気の言葉を本気で聞くのは当たり前のことです。みんなはそれができなかったから、先生はここに来ました。」——

ここに「聞く」ということに対する鋭い指摘があり、同時に教師と子ども、子どもと子どもとの「関わり方」についての本質的な示唆が込められている、と私は考えました。

だから私は、子どもたちに対して「聞くことを大切にしよう」。「聞くことは友だちを大切にすることだし、ひいては自分が大切にされることだ」と、1年生から6年生まで、ひよっとしたら通じているのかどうかわからなくても、何度も何度も繰り返しながらしつこいくらいに言い続けてきました。

けっこう前のめりになるくらいの思いを込めて紹介したのですが、映画を観た直後に、二人の方の発言がありました。

▼50年前、ご自身の高校時代に同級の女生徒が自殺した話をされました。学校からは何の説明もなく、自分も忘れてしまい、何もなかったかのように高校生活を過ごしていた。

▼高校入学してすぐのころ、朝女生徒が真っ赤な顔をして教室に入ってきて机にうつぶせてしまった。直後に教師が来て「ちょっとこい」といって連れ出した。そのまま学校に戻ることはなかった。自分も何も言えなかったし、普段と変わらぬ高校生活が何もなかったかのように進んでいった。その経験を思い起こせば、ムラウチ先生の言葉ですら、説教に聞こえてしまう。――

いじめや自殺の問題は、教師と児童・生徒の間の「聞く・聞かない」のようなことで解決できる問題ではないのではないかと、といわれているようで、そんな話を聞けば、映画のセリフはどこか作り物のようで空虚さを感じてしまいます。現実の高校（学校）現場は、昔も今も映画のように行かないはるかに厳しい実態がある、といわれているように聞こえるからです。

もう一つのクライマックスの場面を流しました。

◆自分がノグチ君を自殺未遂に追いやったのではないかと、遺書に書かれている3人の名前の最後は自分ではないかと、悩み続けている少年とムラウチ先生の会話がある――

「だから僕は反省もして、後悔もして、ノグチにたくさん謝って、また一からやり直そうとして」「一からやり直すなんてひきょうだろ。ノグチ君は忘れない、きみたちのことを一生、絶対に忘れない。みんな一生忘れられないことをノグチ君にしたんだ。だったらみんながそれを忘れるなんてひきょうだろ。ノグチ君のことを忘れちゃだめだ。ノグチ君にしたことを忘れちゃだめなんだ。それが責任だ。」



教育というもの、ある意味「芝居じみている」のではないかと思うときがあります。教師も子どももそれを承知で、「劇的なもの」を共有して学校生活を過ごしているのではないかと。それを白々しく感じるのか、「共有」できるのかは、互いの信頼関係なのかもしれません。

学びをひろげる 第30回のまとめにかえて

松井直哉

映画「青い鳥」でのムラウチ先生が「本気の言葉を本気で聞くのは当たり前のこと」と言っているが、私は違和感をおぼえる。

例えば私の相容れない宗教活動に従事している方の言葉は、「相手が本気だから」という理由だけでは本気で聞かない。

例えば泥酔している方の言葉は、一時的とは言えかなり本音を吐露していることが多いので、時間の余裕があればかなり真剣に聞くようにしているが、いつでも聞くのをやめていいというスタンスは持っている。（「本気」と「本音」は区別すべきだが）

私が本気で人の話を聞くのは、相手が本気だからではなく、本気で聞くことが自分にとってメリットがあると感じた場合だ。そのメリットとは、多くの場合は自分の好奇心を満たしてくれるという質のものだが、時には本気で聞くことで自分が成長できそうだという予感の場合も

ある。

実際に心の奥底から絞り出してきた言葉に接したとき、自分の心も揺さぶられ、震えて、結果今までの自分にはなかった心情が生まれてくることはよくある。私はそれが人間の成長だと思っている。そんな自分の成長の予感があれば、私は他人の言葉を本気で聞くようにしている。(年齢のせいかな最近はめっきり少なくなってきたが)

現代社会では情報はわざわざ収集しなくても溢れている。ただ、どうでもいい情報が多すぎるので、適当に聞き、適当に突っ込み、適当に相槌を打つのが、どうでもいい情報に対してのふさわしい対応かもしれない。またそんな対応でも、相手に対して失礼にはならない場合が多い。そんな情報に対しての接し方に浸りきって慣れきっている人間は、ノグチ君の言葉を適当にあしらう。そしてムラウチ先生の吃音を笑いのネタにする。あまりにもよくある光景だ。

どうでもいい情報に対する接し方と心の底から絞り出す言葉に対する接し方の区別もできないのなら、人間どうしのトラブルや悲劇は必然と言ってもいいだろう。

だから、学校教育に限らず、子どもたちには、人の言葉を真剣に聞いたので自分が成長できたという実感を少しでも多く経験してほしい。できればある人の言葉から始まって、みんなで考えみんなで意見交流をしたので、自分が成長できた、と集団としての経験——研究会の意見交流でどなたかがおっしゃっていた、授業の中で間違った答えが出た場合、その子のおかげでこのクラスは深く勉強ができた、という実感をもつような経験——ならもっと望ましい。

私は現役のころ、子どもに「聞きなさい」という指導はせずに、聞かなかったので損をしたとか聞かなかったからクラスの話題に取り残された、という場面をできるだけ作ろうと試みた。「えっ、〇〇君、今何て言ったの?」と聞かれても、教えない。「えー!聞いてなかったん?そりゃ残念やったね。すごくええこと言ったんやけどなあ。」などと損した感だけを植え付けることもよくあった。

今回は、「聞く」ことをめぐって、参加者が各自の経験や実践を語り合う場となりました。「聞く」こと「話す」ことの意味を深く掘り下げてみたいという、私(松森)の意図があったのですが、やはり提案者(松森)の実践を通した報告が必要であったと、反省しています。

次回も「聞く」というテーマを考えてみたいと思います。スクールカウンセラーの現場からの話を提案していただく予定です。乞うご期待!

